記憶の煌めく光の下で

佐山広平

僕は遠い記憶に追われ
窓に射す柔らかな日差しの眩しい光につつまれる
観念の織りなす君のほほ笑みを瞶め
レールの寂びついた駅に降りた

駅は遥かなイメージの錯綜に重なりながら
澄んだ大気を染める季節の匂いを僕におくる
いりくんだ道のひとつひとつの
ひっそりした物音を僕の記憶が歩む

僕らは
呉服店の前を　洋品店の前を　電気店の前を
金物屋の前を　雑貨屋の前を　理髪店の前を通る
そして
郷愁がイメージを溢れさす駄菓子屋の前を通る
すると
僕の足は囁きにつつまれる歩みに触れ
かって僕が　ひたすら憧れた和菓子屋の前の
華やいだ色彩のウインドに
僕の意識は軋み幽かな叫び声をあげた

町の伝説が木々を緑に描く境内を
町の伝説が立ちのぼる墓の庭を
僕らは歩いた
爽やかな物音と微かな匂いを瞶める意識を
僕らは歩いた

通り道に広い縁を見せる家々の前を
家の奥の彼方　庭の植木の緑の
朝餉の匂いの漂う風を受けながら
僕らは歩いた

僕らはいつか峠道を歩いていた
店の前に床几の置かれた
店のなかの炉の上に
自在鉤に
鉄瓶が吊るされた
懐かしい風景の
老爺が優しい光をおびた眼で瞶める
峠小屋の前に来ていた

床几に腰をおろした僕と観念の君
僕らの歩みを　僕らお互いの肌の囁きを
そして僕らの愛に
眼を注いでいた老爺の
慈悲の道の辺の石仏の神の眼の
光のなかで僕らは休んだ
すると
ただ　僕の記憶の　観念の君の
ノートでの出会いの
教科書に佇む
安らぎは遥か彼方へ静かに流れていった

陽の煌めきに遠い季節が透けて

佐山広平

季節が光をおくる空の下
遠い記憶が風景に流れる
古びた列車の走る
山あいの鄙びた町を訪れる
皮膚の郷愁に染まる　澄んだ大気のなか
ひっそりした街道の物音に過去が反応する
生活の匂いがイメージに重なる家々
墓の庭の線香の香が祈りに流れこみ
神社の境内の子どもの甲高い声の行方に
森のミンミン蝉の瞳が瞬きする

青空に明日を語る学校
校門に連なる吊り橋の上の小さい靴あと
遠い小学生が橋を渡っている
すると
ランドセルの揺れる音に橋は微かにほほ笑む
そして流れの中では　河鹿が耳を敲てる

少年の孤独を通る影の
少年の明日を通る影の
校門は　悲しみを　苦しみを　辛さを　怒りを　癒す
講堂の教訓　生きる彼方
学校正面の時計　屋根の風見鶏
遥かな稜線の彼方
時間の彼方をを瞶めつづける

懸垂のできない悲しみの日々
九九の口唱を忘却した日々
漢字の形に怯え意識が軋んだ日々
校門につづく桜並木の坂道の土についた下駄の歯の痕跡は
少年の暗い孤独を刻みつける

空がほほ笑んだ日
ノートが文字に埋まった日
細い路地を喜びに弾んで走り出し
水路のある道に跳んだ少年
自転車との不意の出会い
霞んだ意識が遠い森を歩みながら
血の流れる脛の感覚に水路が少年の身体を流す

町役場の板壁に沈黙を刻む蛾
小さな点のような眼に挨拶をおくる
夕暮れの日差しのなか
友人の父の営む病院のまえで
美少女と出会う
羞恥の深淵

記憶が眼に　心に　風景を描く
商店のウインドの連なりの
洋品店のウインドに
映りつづける美少女の映像の
虚構を歩きつづける
すると
店の窓ガラスはただ夕暮れの日差しに煌めき
見知らぬ男が水を撒いている

夕暮れの哀しみに似る

視線の裂ける悼みに

遠い少年はいつか小学校の校庭に立っていた

白侘助の瞶める彼方は

佐山広平

光を歩む朝のひととき
時を歩む朝の柔らかな光の中
街はずれの公園の大気に染められ
黒侘助　紅侘助　覆輪侘助　数奇屋侘助　胡蝶紋侘助
のなかに
白侘助は花開く

それは多様な開花のなかのひとつ
初冬に開花する　真冬に開花する　晩冬に開花する　早春に開花する
小さな花形の開花　大輪の開花　中ぐらいの花形の開花
いっぱいに花弁を開く開花
花びらを二色に染める開花
斑模様の開花
だが
白侘助は花弁を八分咲きに開花する

青年期の樹木の　若々しい緑葉のあいだの
ただ一輪　孤独に咲く
ひっそりした開きの開花
柔らかい日差しの注ぐ透明な空間のなかの白侘助
それは
青年の
自負を秘めた羞恥を溢れさせる生の
世界を瞶める
思想を瞶める
明日への投与

多様な生の生きるものら
椿たちの多様な生
木々たちの多様な生
獣たちの多様な生
人々の多様な生
愛を放射する眼差しの生

白侘助　君の開花は
空が純白な花びらに眩しい
君の羞恥に少年が己を見る
君の自負に青年は己を見る
それは
青年期の生が羞恥の奥に自負を秘めた姿

学びの重さの幼い日々　自負と意志の少年の日　矜持に自己を瞶めた日々
学び舎の机に開いたノートに映る
黒い革鞄に収めた厚い辞書の驕りの
論理に時を過ごした思想と哲学の書の
観念に生きた日々の
観念に連なる生の輝き
それは　世界への投与
知を投げかける　愛を投げかける
そして　観念の投与
だが　時に
他者の情念を　他者の意識を　他者の世界観を　生の彼方に投げる
自己陶酔の投与

今　白侘助に語りかける僕
遠い日の生の蹠きの残像のなか
遥かな情念の残像に追われ

道の辺の小さな花に
芽生えはじめた田の稲に和みながら
白侘助の描く風景に触れ
朝の大気に立ち竦んでいる

●佐山広平

菓子問屋の小僧、手造り飴の職人見習いの後、印刷工（植字工）をしながら、愛知県立瑞陵高等学校の定時制普通科に入学し、卒業する。高等学校卒業の三年後に国立愛知学芸大学中学過程国語科に入学し、卒業する。
後、愛知県立高等学校の国語教諭として六校を歴任。後、定年退職。